

はじめに

東アジアの食・健康・環境を取り巻く問題は、ヒトの生命と生存を脅かすグローバル環境リスクである。特に中国は、世界最大規模の人口を誇り、急速な都市化、工業化、経済成長を遂げる一方、食の安全性の問題、生態環境の破壊、大気汚染そして健康被害などの課題に直面している。現代中国の政治的、経済的、社会的、文化的状況を俯瞰すれば、食・健康・環境問題の拡大抑止の可能性は十分に整っていたはずである。また、中国は日本の公害問題から学ぶこともできただろう。だが、諸問題に対する長期的、抜本的解決策が見いだせておらず、短絡的な対策の繰り返しにとどまっている。そこで、歴史・地域的視点にもとづく、多角的視点から長期的な予防・解決策を模索、人材育成へと発展させることが喫緊の課題となっている。また、日本と中国は食、経済、地理的に緊密な関係にある。つまり、中国の食・健康・環境問題の改善・解決が、日中関係改善の可能性をも秘めていることを示唆している。

本書の目的は、中国および日本から食・健康・環境にまつわる最新の動向や研究成果を報告いただき、研究上の進展、とりわけ文理融合プロジェクトの可能性を探ることにある。

とくに、以下の四つの問題を取り上げる。第一に、食品の健康に対する影響は、自然環境と人体の安全、およびそれを担保する社会システムに関わっており、具体的には、食品加工過程において残留農薬や食品添加物など化学物質からどのようなリスクが生じうるのかという問題である。第二に、化学物質に由来する食品と健康の問題は、社会システムとして、残留農薬や食品添加物などに対して、どのような法的規制や行政的関与が行われるのかという課題として具体化される。同時にそれは、化学物質の使用を抑制(ないし

極小化)することによってリスクを回避しようとする取り組みを生むことになる(有機農業)。第三に、この問題を人体の健康と環境の問題から捉えなおすと、それは工場排水や生活排水の環境に対する負荷の問題にほかならない。環境法制と環境保全のための行政的基準が作成され、それらに依拠するモニタリングと実態分析が行われる。第四に、食・健康・環境にかかわるリスクはすべてがすでに科学的に解明されているわけではない。関連する法的・行政的整備は、このような限られた科学的知見にもとづいて行なわれることになるが、もしメディアがこの限定的な知見を「常識」と受けとめそれを社会に発信するならば、それは深刻な混乱を生みだしかねない。

以上のことから、「食・健康・環境」というわれわれが直面している21世紀課題群にとりくみ、有意な処方を構想しようとするれば、原理と応用を志向する文理各領域を架橋すること、アカデミズムと行政やメディアとの交流、そして課題を共有する東アジア各地域を跨ぐ対話が不可欠であろう。